

元良勇次郎の思想形成期

森川多聞

はじめに

元良勇次郎（1858—1912）は、帝国大学心理学講座の初代教授であり、本邦における実験心理学の草分けとして周知されている人物である。元良の世代は、幼少期に明治維新を体験し、西欧学術の導入と共に教育を修め、帝国大学が日本人教員で占められつつある時期にキャリアの最盛期を生きたことになる。

この世代の思想の背景をなす知識は、多種多様である。既に先行研究によって、この世代が「前の世代ほど体系的ではなくても、やはり幼少期に儒学教育を授けられ、しかるのちに西洋に目を開いた」という「中間の世代」と指摘¹されているように、かれらは、近世的学術体系だけでなく明治維新後の学制からも逸脱していた世代といえる。このことは、彼等の思想を考える場合、おのおのの環境や個人的な思想的影響関係をたどる必要があることを示している。

この意味での元良の個人史研究は、近年次第に充実しつつある。転換点になっているのは、元良の学位論文 *Exchange: Considered as the principles of life*（社会生活の原理としての「交換」）が1989年に発見されたことである。発見以前では、元良の実験心理学的著作が近代心理学の起点であることが強調され、心理学史上の叙述に止まる傾向にあったが、発見以降、元良研究は、社会科学全般を視野に入れた書き換えが進展しつつある。

これまで周辺人物の述懐などをもとに考察されてきた元良のイメージ—背教した合理主義者、科学的立場を堅持した学者—を捉え直すべく、同志社時代や留学時代の学問環境の洗い出しなど、次第に元良個人の史的背景を明らかにする研究が増えつつある状況である。

本稿では、元良への影響が指摘されながらもその内実が問われることのなかった事象について考察する。具体的には、元良が幼少期を過ごした幕末維新时期三田藩の状況、三田英蘭塾について、J. T. ギュリック（1832—1923）の同志社での進化論講義、W. B. カーペンター（1813—1885）の『精神生理学の原理』等の内実を確認し、元良にいかなる影響を与えていたのかを明らかにすることである。なお、元良勇次郎は1881年に婚姻を期に杉田姓から元良に変わっているが、煩瑣を避けるため本稿では元良でとおす。

一 幕末維新时期の三田藩

元良は、最後の三田藩主九鬼隆義（1837—1891）が藩主の座に就く前年の1858年、代々小姓役を務めた60石取²杉田家の次男として生まれている。元良の幼少期は様々なシステムが劇的に変革している時代であり、元良の思想形成に大きな影響を与えている。まずは幕

末維新期の三田の状況³を確認しておきたい。

隆義は、著名な白須次郎の祖父退蔵（1829－1891）を抜擢し、身分制度の改正や洋式兵制に改編する等の開明的な藩政改革を行った藩主であった。その一方、身代の少ない外様譜代天領がモザイク状にひしめく播磨国にあって、当初隆義は外様ながら「あく迄徳川ヲ大切ニ致ス」⁴という佐幕よりの態度を取っていた。しかし、鳥羽伏見の戦い（1868年1月3日）が勃発すると7日に帰藩し、早くも10日には山陰道鎮撫軍総督西園寺公望（1849－1940）に帰順する。以後、50名の兵卒を京都御所警備の為に派遣するなど、新政府側の立場を明確にとることになる。

1869（明治2）年6月版籍奉還により、隆義は藩知事に就任する。隆義の周囲には、旧三田藩士で、幕府開成所教授であった川本幸民（1810－1871）が帰郷しており、白洲退蔵ほか幸民の旧知である福沢諭吉（1835－1901）といった先進的知識人があった。彼等の協力のもと、隆義は開明的な施政を計画しており、当時の書簡からもその内容を垣間見ることが出来る。

（前略）御帰国後益御盛被為入、近日ハ洋学校御取建之思召も被為在、就ては外国江書籍御注文之義、取計可申旨承知仕候。当年春頃より時々入用之書類、アメリカ江注文申遣し、元価ニて手ニ入候間、如何様ニも御取次可仕。尚又一昨日川本氏より、後入用之品々目録送参り候間、当月中旬飛脚船へ可申遣、凡ニヶ月ニて品物着可致奉存候。

都下も相替候義無御座、私方ハ唯読書而已ニて、世の新聞も耳に入不申。文明開化ハ中々程遠き事と奉存候。世の文明よりも一身之文明專一と存し、他ハ顧るニ暇あらず候。洋学校御取建相成候ハ、治（レ点）人の君子を御引立相成候より、為（レ点）人治（ニ）の小人を導き候よふ、御注意被遊度。方今世の中ニは治国之君子乏しきニあらず。唯欠典ハ良政府之下ニ立ち、良政府の徳沢を蒙るへき人民の乏しきなり。下よりこれを求めされハ、上よりこれを施さざるも亦宜なり。災害下より起れハ、幸福も亦下より生ぜん。小民之教育專一と奉存候。呵々。此段貴答申上度、早々如此御座候。頓々首々。⁵

隆義が一般の民衆が修学できる洋学校のアイデアをもっており、知識人の協力のもと積極的に新しい国作りに参与していることがわかる。福沢の「方今世の中ニは治国之君子乏しきニあらず」「良政府之下ニ立ち、良政府の徳沢を蒙るへき人民の乏しきなり」という言葉からは、知識が富裕層や武士階級に偏重しており、教育制度が社会全般に行き渡っていないことが当時の社会の欠点だという認識が見て取れる。このことは同時に、階層的な身分社会が問題の根本にあり、これを解体させなければ新しい国作りは不可能であるということの意味する。実際隆義は、廃藩置県に先立つ1871年5月に、政府に以下のような上申をし、許可されている。

蓋シ万国ニ抗スルノ道其要唯人民ヲシテ各自独立ノ境ヲ得セシムルニ在リ、則チ一人ノ独立ハ一國ノ独立、一國ノ独立ハ則チ天下ノ独立ニシテ、彼所謂世禄ハ大ニ人民独立ノ道ヲ妨ケ随テ人才登用ノ道モ亦塞ルベシ、固ヨリ郡県ノ体裁ニ於テ万不可然者ナ

り、況ヤ旧藩ノ政刑ヲ始メ旧知事ノ家禄士卒ノ給料之ヲ除キ其余幾許ゾ、此又其名アリテ其实未全者也。然則臣（※筆者補足：九鬼隆義）始一藩ノ者ニ至ルマデ只当ニ断然速ニ其禄ヲ辞スベキ耳、（中略）故ニ臣愚以為ラク漸ヲ以テ農商ニ帰スルノ勝レルニ如スト、然ルニ臣独厚顔藩秩十分ノ一ノ禄ヲ得テ一藩ノ者ヲシテ農商ニ帰セシムルハ理勢ノ難キ所ニシテ一藩ノ者モ亦之ヲ何トカ謂ハン、仰キ願クバ臣ニ賜フニ十分ノ一ノ禄ヲ以テセズシテ臣モ亦漸ヲ以テ農商ニ帰スルノ許可ヲ以テセバ臣之ヲ以テ目的ト為シ追々其処置ヲ成ニ於テハ一藩ノ者喜テ其道ヲ得、五ヶ年ヲ期シテ一夫其処ヲ得ザル者無シテ奉還ノ実策正ニ成リ三田藩ノ実始テ全ク 朝廷ニ帰セン（後略）⁶

「一人ノ独立ハ一國ノ独立、一國ノ独立ハ則チ天下ノ独立」という福沢ゆずりの国家イメージを下敷きに、その妨げとなる「世禄」を変換し、五年の計画によって自ら以下武士階級を「農商」に返そうという上申である。この上申の副表には、華族士族の称号も不要である旨も記載されている。隆義は、福沢の示唆する新しい国のビジョンを共有していたといえるだろう。

また三田藩士も既に版籍奉還の1869年の時点で行く末を話し合い、「衆情ノ赴ク処ヲ以テ土着ト決ス」⁷という結論を出している。1871年7月、廃藩置県が実施されたため、既に進められていた先の上申にある一藩帰農の方策は取り消しとなり、全国に通達された方法による廃藩が進められることになった。三田藩は三田県を経て兵庫県へ合併され、新階級である士族籍の整理が行われる。大身の旧藩士と共に神戸に移住した隆義は、翌1872年9月に三田に訪れ、新官吏の赴任によって免職されていた旧藩士族を召し、分配金を授け「家禄なきものゝ如く見倣し銘々独立の基を相立活計の方法取立」⁸てるよう指示しており、後に布告されることになる家禄奉還制度をも見込んだ自主的な帰農商計画の実施を、旧藩士族たちに命じている。

三田藩での武士階級の解体は、その先進的な旧藩の方針によって、比較的到他所に先んじて進んでいたといえる。当時三田におり、後に『七一雑報』の編集長となる村上俊吉（1847-1916）の回顧録においても、1869年の頃より藩中の一般男子の服装を洋風に改め、断髪を許し、パンや牛肉を求める風潮が記されており⁹、物心共に新しい時代へと積極的に適合しようとしている環境にあった。しかし、隆義のラジカルな施政方針は、後に実施される新政府の制度と異なっていたこともあいまって、先に帰農していた下士の困窮をまねき、また上士であっても農業に従事したものは失敗するケースが多く、平穏無事に新時代へ移行したというわけではなかった。元良の実家杉田家も、有馬郡宅原村に帰農したものの失敗した実例である。次節では、この間の元良の履歴を、三田藩の移り変わりに照らして考えたい。

二 幕末維新时期の元良勇次郎

この時期に関する元良の履歴については、幾つかの研究と略伝がある¹⁰が、記載漏れや年

代の齟齬もあり整理が必要である。近年、本井康博も整理を試みている¹¹が、さらに詳しく考察しておこう。

故元良博士追悼学術講演会が編述した『元良博士と現代の心理学』（弘道館、1913年）に記載される姉崎正治（1873-1949）の「故博士履歴」と、高島平三郎（1865-1946）の「諸氏の追憶談による故博士の略伝」とが、ひとまず公のものとして基準となる。まずこの二つの情報源から要点をひろうと、元良は造士館に数ヶ月通っており川本の英蘭塾にも在籍している、J.D. デイヴィス（1838-1910）について神戸に行く前にも神戸での学問期間がある、数えて15歳の時に父を亡くしておりこのとき三田にいた、という点があげられる。

資料的に確実に確認できることから整理すると、まず元良が籍を置いていた、川本幸民とその息子清次郎とが主宰する英蘭塾の在籍期間である。英蘭塾は、1868年7月に始まり、1870年7月に清次郎が新政府に出仕する以前に閉塾している。元良の英蘭塾名簿¹²では7月という入塾記録が残っているが、名簿の順序と閉塾のタイミングから考えれば、1869年の7月に入塾したと考えるのが妥当である。数えて12歳から13歳（満10歳から11歳）にかけての一年弱の期間在籍していたと考えられる。

また高島の略伝では、造士館に在籍して数ヶ月で造士館は閉鎖され、その後兵庫の廣見多聞の寺子屋に住み込んで習字をならっていたが、劣悪な環境で学習自体も殆ど行われなかったために、一年弱で帰されたとの記載¹³がある。造士館での修学は、鳥羽伏見の戦いから版籍奉還までの時期と考えられるので、英蘭塾入塾直前の1869年正月前後数ヶ月のものと推察される。1868年では、数えて11歳、11月以前であれば満9歳であることから、それ以前はおそらく三田杉田邸から遠くないところで手習いをしていたはずである。姉崎は数えて13歳の時に兵庫で英語を学習していたという記述¹⁴をしているが、英蘭塾閉塾以降に兵庫に出たことは間違いないようである。ただし、英語を学習していたかは疑問である。当時三田藩士が英語教育を受けることが可能であった最初の組織は、前田泰一（1846-1884）ら旧三田藩の青年士族が宇治野に設立した英学校である。しかし、その設立は、1872年12月のことであり、伝手もなく英語学習をすることは想像しがたく、やはり兵庫での滞在期間は住み込みの手習いをしていたと考えるのが妥当であろう。その期間は、英蘭塾閉塾から父泰が没する1872年5月までの二年弱の期間のうちのことと考えられる。

また三田でのキリスト教布教¹⁵は、隆義とデイヴィスとが有馬で接触する1872年9月以降であり、元良は数えて17歳（満15歳）の1874年初頭に、デイヴィスと共に神戸に出て、その年の7月に受礼している。父親の没する1872年5月からデイヴィスと神戸に出る間に一年半ほどの間がある（この間旧暦から暦が切り替えられているので一ヶ月少ない）が、デイヴィスとの関係を作る期間と考えれば、この間三田に滞在していたと考えられる。

分かりやすく満年齢でまとめると、満10歳になったばかりの1869年正月前後に数ヶ月間造士館に在籍し、満10歳の7月から翌11歳の7月まで英蘭塾に学び、その後一年弱住み込みで三田を離れ、満13歳の5月に父親が没するまでに帰郷し、15歳になったばかりの1874年初頭にデイヴィスと共に神戸に出たということになる。以上の元良の履歴と三田と

の関係を見てみると、三田藩の正統的学問機関でもあり、所属期間が比較的長い英蘭塾での学習が、元良の幼少期における焦点と言えるだろう。

英蘭塾を主宰していた川本父子、とりわけ川本幸民は、坪井信道（1795－1848）門下で、同門に緒方洪庵（1810－1863）、青木周弼（1803－1864）、杉田成卿（1817－1859）などがある。三田藩士として江戸に学びながら、1856年から蕃書調所に出仕し、1865年には教授筆頭を拝命するなど、当時において飛び抜けた西欧科学の知識を持った人物として知られていた。幸民は三田藩を離れて幕臣になっていたこともあり、帰郷時には、開成所教授手伝でもあった息子清次郎が隆義に召されて英蘭塾を開いたのであった。いずれにしても父子共に教壇に立っていたという塾内において、幸民由来の自然科学的思考方法が、元良へ影響を与えていた可能性は高いといえるだろう。

幸民の主要な著作は、写真、電信、武器、西洋船舶の仕組みを説いた『遠西奇器述』（1854年）、物理学教科書として流布した『気海観瀾広義』（1856年）、67個の元素について詳述した『化学新書』（1860年）等があるが、これらの著書に共通することは、自然界の現象そのものを、合理的に理解しようとする姿勢である。

例えば、岳父青地林宗（1775－1833）が記した『気海観瀾』（1827年）を解説した『気海観瀾広義』には、物理学についての説明が以下のように付されている。

費西加者、窮物理之学也。其要先知其物、而後察其用也。

物トハ体アル者ヲ指ス。人獸草木金石皆物也。凡我カ体外ニ存テ能ク吾カ五識ニ触ルハ者、皆物ニアラザルハナシ。即チ眼ノ見ルベク、耳ノ聞クベク、鼻ノ嗅グベク、舌ノ味フベク、皮膚ノ触知スベキ者、是ナリ。（中略）夫レ眼ノ物ヲ見ルヤ、物ト眼トノ間、光素アリ。耳ノ声ヲ聞クヤ、物ト耳トノ間ニ空気アリ。空気ノ分子ト光素トハ、質最小ナリト雖、又体アリ。物トシテ体ナキハナシ。体トシテ用ナキハナシ。故ニ「ヒシカ」ハ物体ト其用トヲ知ルノ学也。¹⁶

我々がそれと知覚できる様々な現象が、様々な物質の働きを媒介にして現れていることを指摘し、その仕組みを明らかにする学問として「ヒシカ」を理解しているのである。

重要な点は、「善ク此学ヲ知ラバ、此等ノ細事ノミナラズ、天地間千万ノ儀象、一々明亮ニシテ残ス所ナカラム」¹⁷と幸民が述べるように、この学問的方法論によって、この世のすべてを知ることができるという視点である。

物理的な現象を理解することによって、我々そのものを含み且つ我々を取り巻くすべての事象が、説明可能なものとなるという認識は、人間及び世界理解の方法論として、前時代と隔絶したものである。英蘭塾での語学学習は、西洋学術の基礎以上のものではなかったであろうが、その動機付けとして、如上の世界観が提示されていたことは想像に難くない。

元良が帰国後展開する社会においても、合理的な原理の考究に基づく「社会学」を立てた上でのアプローチを目指すものであったことは、この基本的な立場を継承したものであるといえるだろう。元良は、

社会改良に従事せんとする者ハ須らく先づ社会の生理と解剖の術を修めざる可らず¹⁸
社会学ハ社会運動ノ法則ヲ極ムル学ニシテ、生理学ノ健全ノ法則ヲ調ブルガ如ク、又
動物学ノ下等ヨリ上等ニ進化スル方則ヲ見出スガ如シ、換言スレバ、社会学ハ人間ガ
集リテ社会テフ大動物ヲ形造レル法則ヲ調ブル学ナリ¹⁹

と述べるように、人間社会の現象を「生理」＝理論と「解剖」＝分析とによって理解可能なものと考えている。このことは、その後の学術的発展に直線的に繋がるものではないにしても、幼少期に方法論的な枠組みが与えられていたということは看過してはなるまい。

元良は、満 15 歳になった 1874 年初頭からデイヴィスに導かれて英語や宗教教育を受け、満 17 歳になった 1875 年 11 月に、同志社英学校最初の生徒の一人として入学することになる。この間の元良の学問内容や思想的影響関係については、宗教的感化の始原であったことは間違いないものの確固たる資料がないため、その内実を知ることは難しい²⁰。そのため次節では、同志社時代に元良が学問的影響を受けたとされている事柄について考察する。

三 ギュリックの進化論講義とカーペンターの『精神生理学の原理』

元良と同志社時代の同窓で、後に帝国大学においても同僚となる中島力造（1858－1918）は、元良の同志社時代について書き残している²¹。中島によれば、満 17 歳から三年ほど在籍した同志社時代に特に感化を受けた人物として、J. T. ギュリック（以下、単にギュリックと略す）をあげ、また愛読していたものとしてスマイルズ（1812－1904）の『自助論』と W. B. カーペンターの『精神生理学の原理』があったと述べている。元良の同志社時代は、幼少期とは異なり事績を跡づける資料が多く、既に学習カリキュラムや人間関係などを考察した論考がある²²ため、本節では特にギュリックの講義と、カーペンターの『精神生理学の原理』の内実を確認することにしたい。

まずギュリックの講義についてである。同志社で講義を行う頃までのギュリックの略歴²³を簡単に紹介しておく。ギュリックは、アメリカンボード宣教師であった P. J. ギュリック（1796－1877）のもと、七男一女の三男として、ハワイに生まれた人物である。1854 年から 60 年までの間、ニューヨーク大グラマースクール、ウィリアム・カレッジ、ユニオン神学校などで学び、幕府時代の 1862 年に横浜に滞在するものの日本での布教が叶わず、1864 年にはアメリカンボードの北中国伝道団宣教師として中国張家口へ赴任し、モンゴル地域への布教に尽力している。進化論に早くから着目していた博物学者でもあり、ダーウィン（1809－1882）とも交流があった。休暇中の 1872 年には、大英博物館でハワイ産の貝類のコレクションを整理するなど、研究に従事し、『ネイチャー』誌に論文を五篇発表している。その後布教活動に戻るが、体調不良や婦人の死去等によって布教活動がままならない状態となったため、1875 年に、父や次兄のいる神戸へ移住することになる。

ちなみにギュリックを含めた兄弟七名が宣教師となったギュリック家は、日本と関係の深い一族である。父 P. J. ギュリックは晩年を神戸に過ごし、次男 O. H. ギュリック（1830－

1923)は『七一雑報』の発刊などで神戸伝道に尽力した人物でもある。また、日本にも滞在していた長男 L.H. ギュリックの息子には、排日移民法に反対し「青い目の人形」の贈答活動で著名な宣教師シドニー・ギュリック (1860—1945) などもある。

ギュリックが同志社で連続講義をおこなったのは、1878年と翌年の二回である。この時に講じた内容は、当時のメモ²⁴に残されており、進化論の学問的背景とその理論の紹介であった。ラマルク (1744—1829) の進化説の問題点を提示しつつ、「進化の過程が歴史的に正しく、また自然選択説が進化の方向性へ、見せかけでなく強力な影響力を持っていると信じていることができる」²⁵ものとして、当時としては最新の進化論に関する情報を同志社の学生に提示したのであった。

当時宣教師の間において、進化論とキリスト教の衝突は、本国アメリカのみならず、日本においても重要な課題であった²⁶。1877年に発足した東京大学の法理学部教授に就任したモース (1838—1925) が進化論の公開講義を行い、聖書批判を行ったのは、同年の10月である。当時の宣教師は、この新しい科学史観との対決を余儀なくされており、信仰の礎となる聖書の正当性を確保することが目指されていた時期である。

この科学と宗教の対立の渦中にありながら、ギュリックが講じた内容は、進化論と信仰が共存可能なものであったという点で特徴的なものであった。ギュリックは進化論が信ずるに足る理論としながらも、一方で不足のあるものとして提示した。ギュリックの示した進化論の不足点は、七つあり²⁷、その要点は、進化論が「生物の起源という神秘」²⁸を解明するためには不足しており、自然淘汰だけが生物の発達に影響をあたえているのではないということにある。

従って私が結論することには、幾つかの変遷は、相対的な (※筆者補足：進化の) 速さによって必然的にもたらされるものであり、かつまた、変化の度合いは、進化の方向性によって決定されながら、しばしば自然選択説の影響からは独立しているということである。私は進化論を信じている。しかしまた、私は、方法や法則、原因や進化の分岐における内部因果関係、あるいは、人と人種、国家の発達、そして進化の理論と、宗教、倫理、自由の問題と意志といった関係について考えるのである。²⁹

科学者であると同時に宗教者であるギュリックは、生物の変遷を単に自然淘汰だけで説明が完結するものと考えておらず、むしろ人間社会に進化論だけで説明しえない関係性や存在があることを積極的に認めることで、神や「宗教」の居場所を確保していたのである。ギュリックは 1883 年の大阪宣教師会議において³⁰「生物界における進化」と題した講演を行っており、そこでは、さらに詳しく進化論の説明可能な範疇と宗教 (キリスト教) の存在意義について論じている。

ギュリックは、生物の発達を進化論のプロセスとして認めたとしても「人間の本性」としての「罪の本性」や、「人間相互および人間と神との関係」における「救済の必要性」は変化しないと述べ、「進化の諸事実は、理性的動物には宗教の支えが必要であることをはっきりとあらわしている」と断定している³¹。

このようなギュリックにとって、人間と動物との双方に適応される進化論的な科学論は部分的なものであり、人を人ならしめている文化的な活動領域において科学的な価値判断は及ばない。ここに宗教の価値を見出すのである。人間は、その知性によって本来知るはずのなかった災いを予知できるようになった。この悲劇的な運命を乗り越えていくために、宗教は、人間を「神的な環境と調和させること」によって「非理性的な動物の平安」よりも「ずっと崇高な平安」を人間に与えることができるのである³²。

古典物理学が完成し、様々な科学的発見が相次ぎ、既存の宗教的価値が崩壊していく 19 世紀後半の思想状況において、双方の調停をはかるギュリックの議論を注意深く摂取していたことは、元良の思想的志向性を理解する上で留意しなければならない事項といえる。

元良が科学と宗教の問題を何処まで突き詰めていったのかという点は、本稿の範囲を超えた問題であるので検討することは避ける。しかし、後に立ち起こる教育と宗教に関する論争³³において、人間の「ミスチック」³⁴なる部分に宗教の領域を是認していた元良の主張の内実を理解するためには、検討の余地がある。元良とギュリックの科学と宗教に対する姿勢の構造的な比較は、必須の課題である。

次に、カーペンター³⁵の『精神生理学の原理』についてである。この著作は、ギュリック以上に、未知なる人間の思考や活動のメカニズムに科学的なメスを入れた内容であり、人間の知的活動のすべてが自覚的な理性の活動の結果であるというそれまでの議論の前提を、根底から覆すものであった。

前出の中島と同じく、同志社で同窓の小崎弘道（1856－1938）は、元良の最初の論文作成が、カーペンターの同著 13 章の「無自覚での大脳活動 (Of Unconscious Cerebration)」を下地としたものであったことを述懐³⁶しており、元良が注目した内容が推察可能である。

当該箇所の骨子は、「無自覚」のうちに我々の思考や感情が変更される可能性がある、というものである。

我々の人や物に対する感情は、最低限の認識を持つことなく、我々が自身の精神状態へ注意を払うようになるまでの間に、変化に気づかないうちに取って代わるような、最も重要な変化を経験したのかもしれない³⁷

ギュリックは、人間の理性的な活動によって生じる矛盾や心理的重圧に対して宗教の居場所を確保する議論をしていたわけだが、カーペンターの議論は、矛盾や心理的重圧によって生じる「精神状態」が如何に形成されるのかという、メカニズム自体の解明を目指しているのである。

曖昧で無意味なものではない多くの現象を科学的解明に導く案内として、他の感覚神経の自動的な活動の研究が、手がかりを与えるからである。³⁸

生理学的な知見が、人間の思考を決定する要因を明らかにするだろうという予見は、宗教的信仰といった「曖昧で無意味なものではない」現象をも、科学的に解明できるのではないかという期待を抱かせる。このカーペンターの生理学的な人間理解のあり方は、そのままフィヒナー（1801－1887）を起点に発展していくドイツ心理学の方向性³⁹と一致してい

るものでもある。元良がこの著作を読んで以降、個人の内面を探る心理学に興味を持つことを考え合わせれば、元良の学問的な方向性がカーペンターを始原として具体化していったことは明らかである。後に元良は帝国大学での最初の講義で「精神物理学」を講じることになるが、ここにおいても人間の活動の原点として感覚や意志を論じながら先行研究を整理していく記述⁴⁰が見られる。

以上を整理すると、とりわけカーペンターの『精神生理学の原理』は、川本幸民の物理的な世界理解のあり方を、人間の内面に具体的に敷衍したものともいえ、熱心に読んだという元良の志向性が理解できる内容である。またギュリックの科学と宗教のあり方は、カーペンターの著作が人間の内面的なメカニズムに特化している内容である一方で、社会的なものとして意味づけられた価値に対して具体的な処方を示唆するものであった。

おわりに

本論では、まずこれまで断片的にしか分かっていなかった元良の幼年期と、その実家である杉田家の年代的推移を、三田藩の状況に照らしながら整理することで明らかにした。

次に元良が、三田藩解体の直前の満10歳の時に英蘭塾に在籍していたことを確認し、次いで英蘭塾の教授であった川本幸民の物理学的学問観を概観した。川本のもとで学問的キャリアを開始した元良は、三田藩解体という波乱の中で、アメリカンボードの活発な布教活動に呼応して、満17歳のときに同志社英学校に入学した。第三節ではカーペンターの著作とギュリックの講義から、人間の内面的分析の手法と、科学と宗教という人間の内外に及ぶ価値を学ぶ契機を与えられていたことを、最後に確認した。

今後の課題は、本論を下敷きとした元良本人の思想の内在的な理解である。元良と同世代の日本人初の哲学教授でもある井上哲次郎（1856－1944）が、日本古来の学問を近代的アカデミズムの中で捉え直す一連の仕事—『日本陽明学派之哲学』（1900年）、『日本古学派之哲学』（1902年）、『日本朱子学派之哲学』（1905年）—の一方で、『勅語衍義』（1891年）や『教育と宗教ノ衝突』（1893年）などに象徴される「近代国民国家における国民のあり方」を積極的に説諭する役割を担っていた⁴¹ことから分かります。まさにこの世代は、新時代への思想の橋渡し役の世代であった。元良も、専門の心理学分野にとどまらず、「倫理」や「道徳」「宗教」といった内容に関しても、『現今将来倫理及宗教』（1900年）といった著作を刊行し、井上と同時期に、積極的に意見を開陳している。このことから、世紀転換期の思想をより詳細に理解するために、本論で確認した事項を踏まえた上で、元良を当時の言説空間に位置付けることが求められている。

注

- ¹ 渡辺和靖『明治思想史—儒教的伝統と近代認識論』ペリカン社1978年、44頁
- ² 「旧三田県華士族人名簿」には70石との記載がある（高田義久『三田藩士族』（私家版1996年、3頁、原本複写あり）
- ³ 三田藩の歴史については、三田市史編さん委員監修『三田市史』（三田市、2005年）や前掲『三田藩士族』、村上俊吉『回顧』を参照した
- ⁴ 桑田優『諸事風聞日記—北撰三田鍵屋重兵衛（朝野庸太郎）家文書』敏馬書房2005年、164頁
- ⁵ 福沢諭吉「明治二年十一月六日付九鬼隆義宛書簡」慶應義塾編『福沢諭吉書簡集』第一巻、岩波書店2001年
- ⁶ 『太政官日誌』1871（明治4）年第30号、5月23日条
- ⁷ 三田地区九鬼家資料「一藩帰農の決議等につき書簡」明治2年、前掲『三田市史 第六巻近代資料Ⅱ』92頁
- ⁸ 小寺家旧蔵資料「九鬼史」1872（明治5年）9月22日条、前掲『三田市史 第六巻近代資料Ⅱ』44頁
- ⁹ 村上俊吉『回顧』警醒社1912年、47頁
- ¹⁰ 元良の略伝としては、高島平三郎「（二）諸氏の追憶談による故博士の略伝」（故元良博士追悼学術講演会編『元良博士と現代の心理学』弘道館1913年）と姉崎正治「（四）故博士履歴」（前掲『元良博士と現代の心理学』）が最も古い。伝記的記述としては高田（前掲『三田藩士族』）の元良の項が詳しいが杉田一族同士の項で年代記載に矛盾があり、注意が必要である。また履歴を考察している研究としては本井康博『徳富蘇峰の師友たち—「神戸バンド」と「熊本バンド」』（教文館2013年）の元良の項が近年で最も新しい考察である。そのほかに荒川歩の「ジョンズ・ホプキンス大学入学以前の元良勇次郎」（『心理学史・心理学論』「心理学史・心理学論」刊行会2号、2000年10月）および「元良勇次郎が同志社英学校在学時の受講した科目について」（『心理学史・心理学論』「心理学史・心理学論」刊行会4号、2002年11月）、また佐藤達哉「海外留学以前の元良勇次郎」（『生涯学習教育研究センター年報』福島大学第6巻2001年3月）等があげられる
- ¹¹ 前掲『徳富蘇峰の師友たち—「神戸バンド」と「熊本バンド」』96～97頁
- ¹² 英蘭塾名簿より、前掲『三田藩士族』16頁
- ¹³ 前掲「（二）諸氏の追憶談による故博士の略伝」119頁
- ¹⁴ 前掲「（四）故博士履歴」14頁
- ¹⁵ 川崎喜久子『近代化と宗教』中央公論事業出版1994年「第三章三田藩とピューリタニズム」、日本基督教団神戸教会編『近代日本と神戸教会』創元社1992年参照
- ¹⁶ 川本幸民『気海観瀾広義』1854年（明治初年静脩堂蔵版）一丁表～二丁表
- ¹⁷ 同上、六丁裏
- ¹⁸ 元良勇次郎「社会改良論」『日の丸』第一巻3号1889年7月、100頁
- ¹⁹ 元良勇次郎「社会学ト始末論トノ関係」『東京教育新報』2号教育新報社1889年3月、15～16頁
- ²⁰ 本井も元良とデイヴィスとの関係について論じており、元良への思想的影響は乏しいことを指摘している。前掲『徳富蘇峰の師友たち—「神戸バンド」と「熊本バンド」』（教文館2013年）96～100頁
- ²¹ 中島力造「【二】同志社時代の故博士」前掲『元良博士と現代の心理学』124～126頁
- ²² 前掲本井康博『徳富蘇峰の師友たち—「神戸バンド」と「熊本バンド」』および荒川歩「元良勇次郎が同志社英学校在学時の受講した科目について」等参照
- ²³ J. T. ギュリックの履歴については、日記を集めて紹介した息子 Addison Gulick の著作 (*Evolutionist and Missionary: John Thomas Gulick, Portrayed Through Documents and Discussions*, Chicago, University of Chicago Press, 1932.) とその抄訳（渡辺正雄榎本恵美子訳 A. ギュリック『貝と十字架』雄松堂1988）を参照した。『貝と十字架』には、渡辺によるギュリックの信仰と進化論の関係について解説も付されており、ギュリック研究の指標となる文献といえる
- ²⁴ Addison, op. cit., pp. 391-393.
- ²⁵ 同上、391頁
- ²⁶ 日本における進化論受容の過程については、守屋毅編『共同研究モースと日本』（小学館1988年）を参照
- ²⁷ 一つ目は、有機体の存在を前提とし、また遺伝と変異の法則を前提として成り立っているため、有機体の起源や遺伝と変異の法則の起源を説明できない事。二つ目は、外界の条件は同じであっても異なった進化がありうる事。三つ目は、色や形における優位を説明できていない事。四つ目は、（進化に関係すると考えられる）微細な生物や電氣的な差異等に対する、我々の感覚の限界を説明出来ない事。五つめは、性淘汰では合理的な発達の説明が出来ないことがある事。六つ目は、変化の過程に相当の期間が必要であり発生の時間的な証明ができない事。七つ目は、人と人と隣接する種との断絶が説明できない事。

Addison, op. cit., pp. 392

²⁸ 同上、392 頁

²⁹ 筆者試訳同上、392～393 頁

³⁰ 前掲『貝と十字架』283 頁

³¹ 同上、285 頁

³² 同上、286 頁

³³ この論争に関しては久木幸男編『日本教育論争史録第一巻近代編（上）』（第一法規出版 1980 年）が概略を論じており、主要な論考は秋山悟庵編『巽軒博士倫理的宗教論集』（初出 1902 年、大空社 1993 年）に収録されている

³⁴ 元良勇次郎『教育と宗教の関係』（初出『社会』2 巻 1 号、1990 年 1 月より全 10 回）光融館 1900 年、38 頁

³⁵ エディンバラ大で博士号（1839 年）を取得した無脊椎動物の研究でも著名な生理学者。ユニテリアン。T. ウィルソン著村田光二監訳『自分を知り、自分を変える—適応的無意識の心理学』（新曜社 2005 年）などで、「適応的無意識」において先駆的主張をした人物として、W. ハミルトン（1788—1856）と並んで注目されている。付言すれば、『精神生理学の原理』の生理学的人間解釈の方法論は、W. ハミルトンに影響を受けながら展開されており、スコットランド学派晩期の、カントの認識論哲学の影響が顕著な時期に著わされたものである

³⁶ 小崎弘道「学農社及び東京英和学校時代」前掲『元良博士と現代の心理学』131 頁

³⁷ 筆者試訳。Carpenter W.B. Principles Of Mental Physiology, 4th ed., New York, D. Appleton 1874., p. 539.

³⁸ 同上、513 頁

³⁹ 木田元『マッハとニーチェ—世紀転換期思想史』新書館 2002 年、49～52 頁

⁴⁰ 元良勇次郎「精心物理学」『哲学会雑誌』1889 年 8 月 30 号

⁴¹ 論争に関しては注 33 参照。井上の言説を国民道徳論のイデオロギー構造転換の指標として論じたものとして繁田真爾「一九〇〇年前後日本における国民道徳論のイデオロギー構造（下）—井上哲次郎と二つの「教育と宗教」論争にみる」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』54 号第 3 分冊 2009 年）があげられる。また、国民国家論と宗教言説にまたがる横断的研究として前川理子『近代日本の宗教論と国家—宗教学の思想と国民教育の交錯』（東京大学出版会 2015 年）を参照

本研究は JSPS 科研費 15K20869 の助成を受けたものである。

（東北大学）